

総合心療センター デイケアパティオ

室長 川渕 忠義

はじめに

令和6年(2024年)は感染症(COVID-19、インフルエンザ等)の影響は前年度に比べ落ち着き、コロナ禍前の利用者数の回復と活気ある運営を目標に取り組んだ。結果として幾分かは改善したと思うような利用者増には至らず依然、運営状況は厳しいと言わざる得ない状況が続いている。そのため当施設で提供する治療・復職支援の質の向上、メンタルヘルスの不調をきたした就労者、事業場のニーズの把握に努めた一年であった。

運営状況

運営体制は、昨年度、異動してきた看護師が4月に病棟へ異動となり、新しく病棟から看護師が異動となった。看護師の異動については二年連続で入れ替わる人事となり、少数精鋭の当部署においては運営上少なからず影響が出ており、治療・支援の質の確保、スタッフのメンタルヘルスに注力した一年であった。スタッフ構成については管理者(作業療法士)1名、公認心理師1名、看護師1名の計3名での運営であった。3名とも精神科歴としては20年以上のキャリアを有し、加えて異動してきた看護師は病棟、在宅部門(精神科訪問看護ステーション、精神科デイケア)での臨床歴があり、精神科での経験値としては申し分なく即戦力として期待できる人材を配置することができた。ただベテラン勢をそろえたことで臨床においては当部署の業務にとどまらず、精神科全体の間接業務が増加している現状があるため、スタッフ個々の負担は増えつつあった。次年度に向けては現状のスタッフ構成を維持しつつ、新たな取り組みに挑戦できる飛躍の年としたい。

実績

活動実績としては(グラフ1)に示すように、年間入所者数38名、年間退所者数36名であり、昨年度に比べ微増した。次年度はさらに入所者数の増加に向け、新しく開院したクリニック等への積極的な働きかけをおこない、これまで利用していただいたことのある事業場との連携強化はもちろん新しい事業場の開拓も推しすすめていきたい。また一日平均通所者数については、昨年と大きな変化はなく、ケースのアセスメントをしっかりおこない、継続した通所ができるよう支援体制の見直しをおこなっていききたい。

次に入所者の紹介元(グラフ2)については、他院・クリニックからの紹介が最も多く8割弱を占めている。今後も他院、クリニックとの連携強化を図っていききたい。次に当院外来からの紹介は昨年と比べ微増している理由として外来医師の増員があげられる。新患の受け入れが増加したことによるところが大きい。次年度も医師、外来との連携に努めていきたい。一方、入院については年間を通して初めて0名という結果となった。主な理由としては当院入院患者層が当施設対象にはならない患者が多くなっている現状があげられる。この傾向は今後も続くと思われる。しかし、対象となりえる患者が入院した際は、これまで同様、病棟との連携を図っていくうえで当施設での臨床経験のある看護師2名が常勤していることは心強い存在といえる。

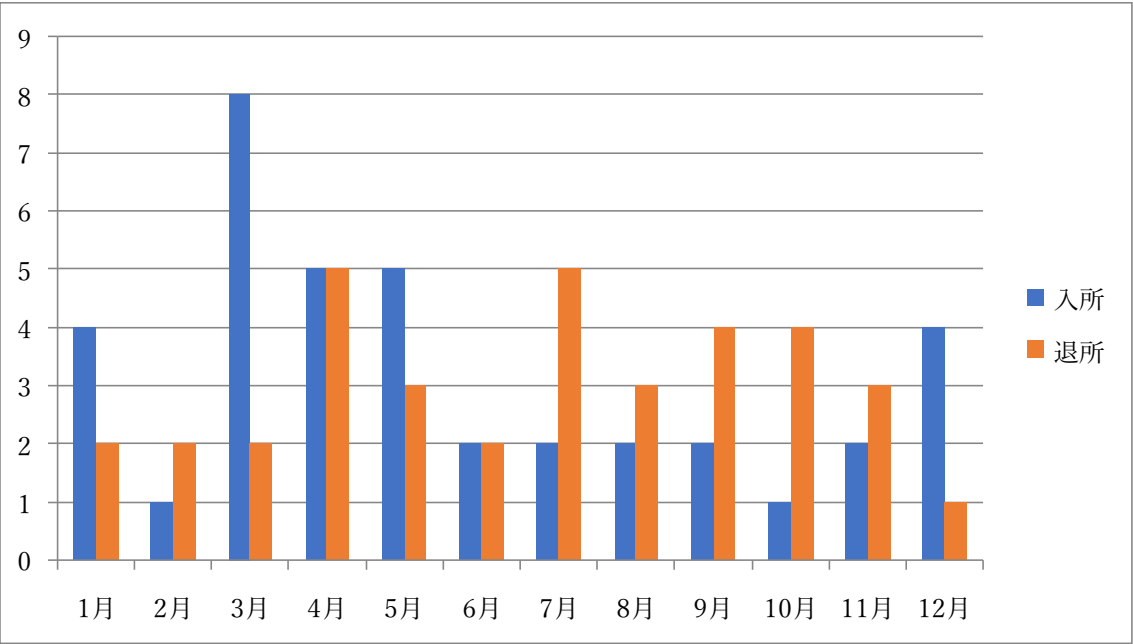
職種別(グラフ3)については、公務員が約7割近くを占め、会社員が3割弱、再就職を目指す無職の方も一定数いる結果であった。

疾患別(グラフ4)の内訳としては、例年とほぼ変わりはなく、軽症のうつ病群を含めたうつ病層が多く、次いでその他に分類している適応障害となっている。適応障害については、ASDをベースとした方が多い傾向にある。利用者の平均年齢については38.2歳と昨年と同等の結果である。また入所から退所までの在籍期間(グラフ5)については、半年から一年未満が最も多く、つぎに半年未満であった。

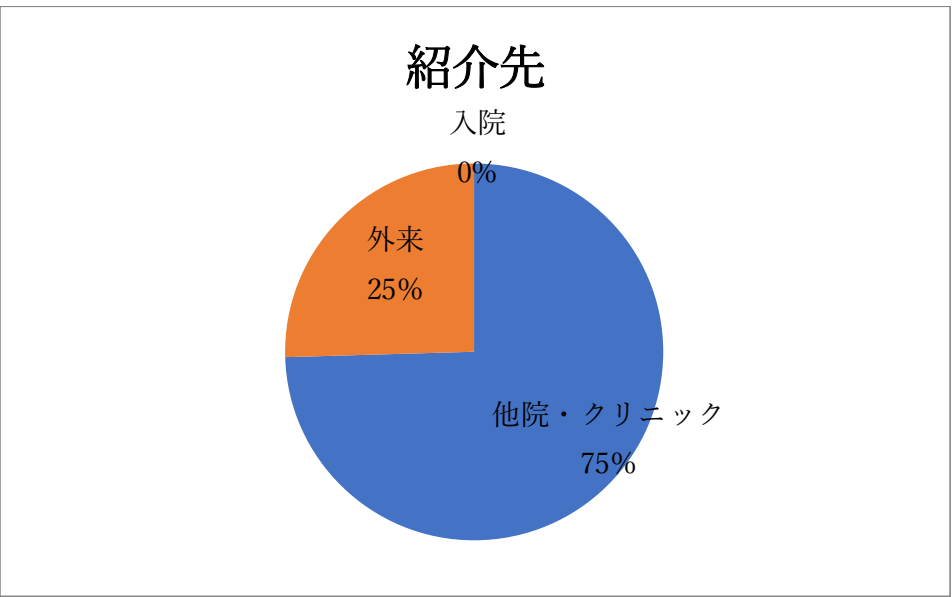
おわりに

次年度は利用者数の増加に向けた取り組みを軸に治療や復職支援がスムーズにおこなえる環境を整備していきたい。具体的には経験値の高いスタッフが働きやすい環境になるよう整備をおこない個々のパフォーマンス向上を図り、提供する治療の質の向上に努めたい。また高知県におけるメンタルヘルス不調者の現状について把握するうえで、新たな事業場との連携を図るため積極的な啓蒙活動をおこなっていききたい。

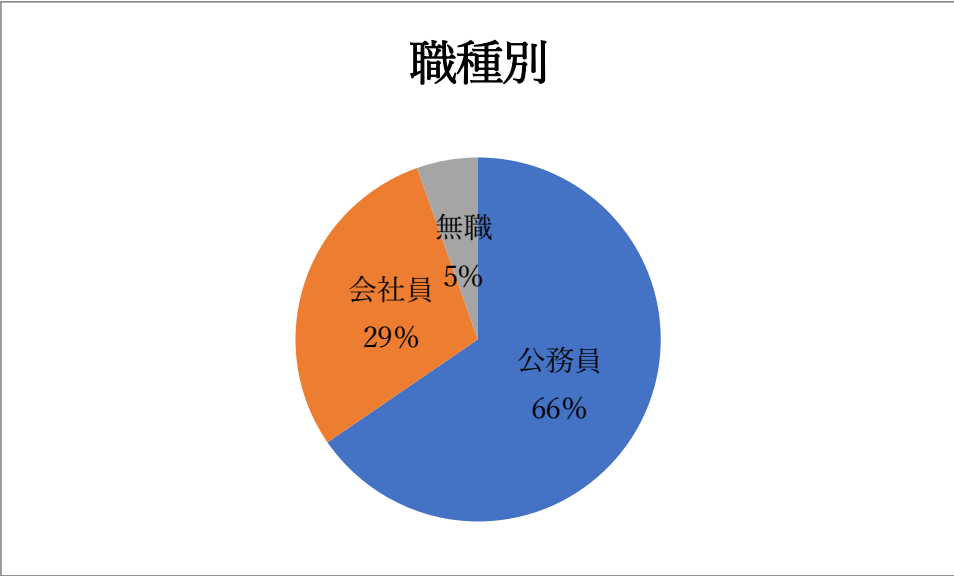
(図・グラフ 1 入退所者数)



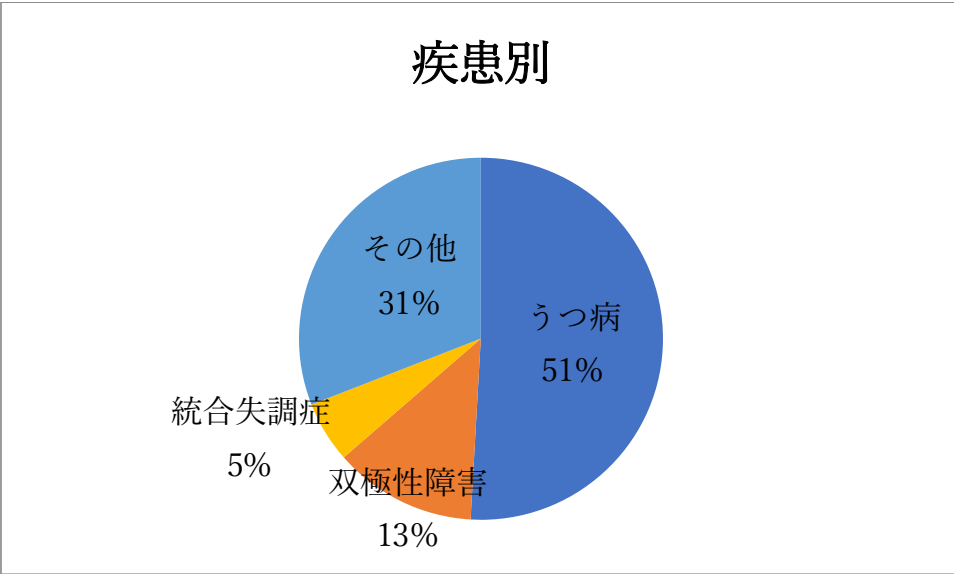
(グラフ 2 紹介元)



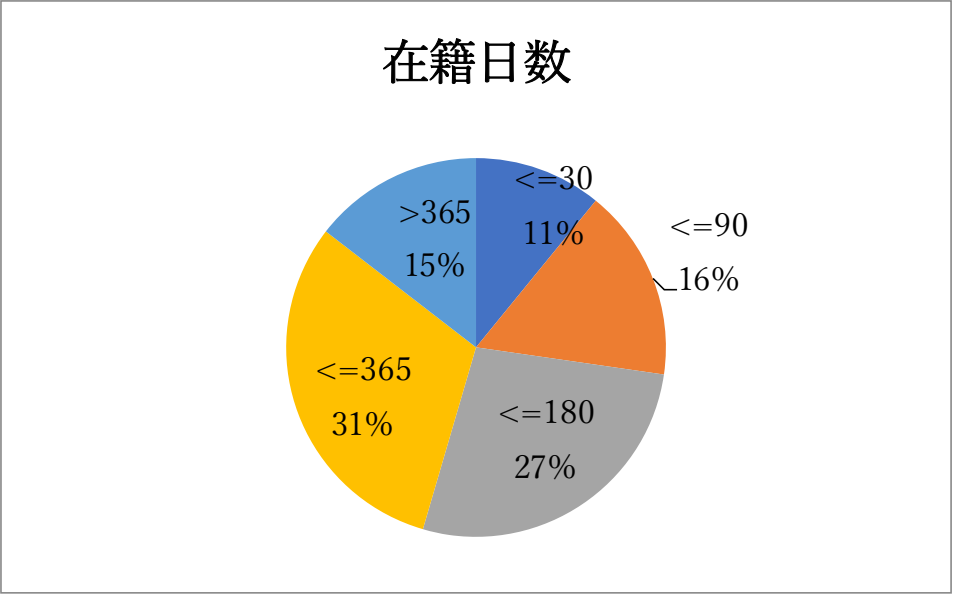
(グラフ 3 職種別)



(グラフ 4 疾患別)



(グラフ 5 在籍日数)



学術発表・講演会等

講演			
演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
リワークデイケアでの取り組み	川渕 忠義	大塚製薬株式会社 第4回多職種でリカバリーを考える会	11月6日 高知